

動物異変記

棕 鳩十



牧書店

異変記

椋 鳩十



牧書店

著者

椋 鳩 十

鹿児島市長田町146

略歴 1905年（明治38年）長野県生まれ
法政法政大学国文科卒 鹿児島県立図書館長を経て
現在創作活動に専念

主著 『動物のふしぎ』『大空に生きる』
『孤島の野犬』『片耳の大鹿』など

定価 380 円

動物異変記

1966年4月18日印刷

1966年4月28日発行

発行者 牧 義雄

印刷者 塚田 重

発行所

株式会社 牧 書 店

東京都新宿区揚場町1番地

電話（269）2081～4

振替（東京）196483

乱丁・落丁はおとりかえいたします。

まえがき

動物たちは、その、くらしの軌道が、きわめて狭い。幾何学の線のように、細くて、きちっと定められている。

彼らは、その軌道から、はみだそうなどという、だいそれた考えは、毛頭もたない。その種族の亡び去るまで、定められた軌道を、はるばると、歩きつづけるのかもしれない。

その彼らに、人間という動物が、一枚参加すると、彼らの軌道が、狂うことがある。

いや、勝手の強い人間どもが、勝手に、そのように、きめつけるのかもしれない。

動物たちは、やっぱり、動物たちの狭い軌道を、歩きつづけているのかもしれない。

目
次

犬政の犬	1
ムカデ	47
アマミのハブ	67
熊	91
七匹のネコ	117
蛇の里	141
長崎の象	165
そうてい・カット／須田寿	

犬
政
の
犬

〈一〉

場末の小さい飲み屋であった。

電燈も暗い。

土間には、テーブルというより、バンダイと呼んだほうがよいようなのが三つ四つ並んでいた。

ちょっとみると、時勢に取り残された店のように見えるが、客はなかなか多い。

客たちは、陽やけした、たくましい者たちばかりである。

彼らは、むっつりと、気難しい顔ではいってくる。しかし、少し酒がはいると、生きいきした明るい顔になる。口も軽くなる。

顔見知りであろうが、なかろうが、どうでもよい。このぼかぼか、あったまってきた気持ち、ぶつける相手があればよいのだ。

隣に腰かけている者に向かって、大声で話しかける。話しかけられた男も、あけっぴろ

げの大きい声で、相槌をうち、自分もまたしゃべりだす。

この小さい飲み屋の土間は、タバコと酒と汗の匂いで、むんむんしている。

すえたような匂いと、怒鳴り声と、陽やけた顔と……この土間に、ちょっとふんごむと、何か異様な、無気味なものを感じる。

彼らの仲間に加わって、しばらく坐っていると、荒涼たる冬野の一角の、金色の陽だまりのような、ほのかになつかしく、あったかいものを、じかに肌を感じるのである。

ここにくる客は、油断のできぬ、ひとくせありそうな、つらがまえのものたちである。が、根は、いい人たちなのであろう。彼らが怒鳴ったり、しゃべったりしているうち、自然に、そういうふんいきが、かもしだされるのであるから……。

この飲み屋に、ある時、陰険な顔をした男が、ぬうっと、はいつてきた。

流れ者であらう。

このあたりでは、ついぞ見かけない顔であった。

入口に立って、暗い土間の中を、ひとわたり、ぐるっと見回した。

あいている席をみつけると、そのほうへ、ぬっぬっぬっと、歩いていった。

こうして、たてこんだ、土間を歩いていくだけで、この男の顔からも、からだからも、

なんとも言えぬ、冷酷なものが、スッススッと立ちのぼっているのが感じられた。

男は、犬をつれていた。

土佐系の犬であるが、なんとも、ボロボロの犬であった。

耳は、一つだけしかなかった。もう一方の耳は、ひきちぎられたように、根もとからなくなっていた。

耳のないほうのがわの、額から斜めに、目の真上まで、ひきさかれたような傷あとがあった。

傷あととは、そこだけ毛がなくなって、ハゲになっていた。

両肩にも、脇腹にも、尻にも、さまざまな傷あとがあった。

つぎはぎだらけの犬である。

目だけは、鋭く輝いていた。

金色の、その目の奥には、どのような邪悪なものが、ひそんでいるかわからない、油断ならぬものを、ひそめていた。

男は、隣の者に、えしゃくもせず、だまりこくって、ぶすっと、あいた席に腰かけた。犬も、男の近くに、しゃがんだ。

先に席についていた男は、犬が、自分の近くに、しゃがむやいなや、バシッと、犬をけとばした。

それは、まことに、素早い動作であった。

前を、じっと見つめたままで、脚だけを、強いバネのように動かして、けとばしたのである。

男のドタグツは、どすんと、いうような音をたてて、その犬の横っ腹を、けとばしたのである。

けとばしておいてから、男は、はじめて、犬のほうをみた。

にらみつけるように、犬をみた。

けとばされても、犬は、肩を張って、しゃがんでいた。そして、自分をにらみつける男の顔を、燃えるような目で、見上げた。

かわった犬である。

普通の飼い犬なら、主人にけとばされれば、キャンキャンという、鳴き声を、かならずあげるものである。

ところが、この犬は、悲鳴も、あげなかった。

普通の飼犬なら、主人にけとばされれば、恐れいって、からだを地面に、びたっとくっつけて、クンクン鼻を鳴らすものである。

この犬は、そんなことはしなかった。

けとばされても、肩を張って、しゃがんでいた。

主人が、にらみつけても、その目を、ぐっと、みかえしているのである。

何か、野性的なものが、血の中で、ぐつぐつにえているような犬であった。

男は、酒と肴をとって、ぐいぐいと、飲みはじめた。

犬は、腹が空いていたのであろう。

その手もとを、みつめていた。

男は、酒をつぎながら、とつぜん、右脚を、バネのように動かした。

目のすみで、犬の油断を、みていたのであろうか。

不意に、右脚をとばした。犬をけた。

男は、よろよろと、よろついた。酒を、ごぼごぼと、こぼした。

犬を、けりそこねたのである。

犬は、そのごたついた、せまい土間で、たくみに身をかわした。

よくもまあ、素早いことができたと思われる身のこなしで、男の、あしげを、たくみにかわしたのである。

男は、かすかに、にたと笑った。

飲み屋の女を呼ぶと

「すじ肉をかけて、犬に飯をやってくれ。」

と、犬の食いものを注文した。

この男の隣にいたのが、さきほどから、新入りの客に、話しかけたくて、うずうずしていた。

「おい、おまえさんの犬は、おっそろしく強そうじゃないかい。しかし、見かけも、おっそろしく、ボロくただなあ。」

親しみをもって、話しかけた。

が、男は、話しかけた相手に、目をくれなかった。

だまって、横のほうを向いているのだ。

「え、おい、そうじゃろう。」

男は、表情ひとつかえず、だまりこくっている。

まったく、完全なる黙殺である。

黙殺ほど、相手の話の腰を折るのに、みごとなやり方はない。

相手の自尊心をふみにじり、相手の心に、重く深い傷をあたえる。

相手は、カッとなった。

「つんぽか、馬鹿か。それとも、おれさまを馬鹿にしてくさるか。」

男の肩をつかんで、ぐいと、こちらに引っばろうと、手をのばした。

その瞬間、犬は、パッと立ち上がった。

ウウウ

と、唸った。

あまり高くない唸り声であった。が、わいわい言っている酒場の、人間どもの声を、ぐ

っと、圧するような、底力のある声であった。ぞっとするほど、気味悪い声であった。

一瞬、酒場の中は、しーんと、静まりかえった。

犬は、黄ばんだ牙を、むきだしていた。

傷だらけの、険悪な顔を、一層、険悪にゆがめて、唸っているのである。

ちょっとでも、男の肩に手をふれようものなら、飛びつこうとしているのである。

男は、しかし、この騒動が、自分のために、まき起こったにかかわらず、どこふく風と、平然としていた。

相変わらず、だまりこくって、杯を口に行っているのであった。

相手の男は、手をつき出したまま、おろすことも、ひっこめることもできず、凍りついたように、突っ立っているのであった。

〈二〉

男は、何日も、この酒場に、姿を見せなかったと思うと、五日も六日も、ぶつつづけにやってくるのであった。

よほどの人間嫌いともえて、いつきても、あいた席に坐ると、しまいまで、だまりこんでいた。

話しかけようともしないが、ほかの者が、話しかけても、相手にならぬのであった。大ぜいの中で、だまりこくって、ひとりぼっちで、飲んでいるだけ。

犬は、影のように、どこに行くにも、男の後に、したがっていくらしい。

たいていの者なら、そういう犬に、話しかけたりなにかするのだが、その犬にも話しかけない。

そしてまた、何らかの意味で、犬好きは犬に愛情を示すものである。ところが、彼はそういうこともない。

犬に対する、彼の言葉は、けとばしである。それも、力をこめて、けとばす。

飲んでは、うつぶんを晴らし、わあわあ、騒ぎ立てるものの集まるこの酒場にとって、この男は、異質の存在であった。

しかし、人生の辛酸を、なめつくした者どもの集まる、こういう酒場は、どんな異質なものでも呑み込んでしまい、くるみこんでしまう。

時がたつにつれて、ここに集まる人びとも、彼の存在を氣にとめず、空気の中にただよう、ゴミのように、目立たぬ常連として、この男を受けいれるようになった。

男が、ぐびりぐびり飲んで隣に坐るものは、彼が挨拶しようが、しまいが、そんなことは、おかまいなしに、

「おお。」

と声をかけるのであった。

この、「おお」は、旅人が、石の上に腰をおろす時に、「どっこいしょ」というようなたぐいのものであったかもしれぬ。

この場末の酒場の常連は、おたがいに、何か親しい身内のように、彼らは考えるのである。

ここに集まるものどもは、こういう常連を相手にして飲み、しゃべり散らすために集まってくるのである。

常連の顔をみれば、一杯さすか、声をかけずには、おられないのである。

場末の酒場に集まる者どもは、彼らなりのやり方で、この男を迎え入れたのであった。しかしまた、彼らは、自分が生きることが精一杯で、相手の生活には、無関心のようにみえる。が、これは、みかけだけのことである。

他人の生活には、おどろくべきほど興味を感じるのである。

そのうえ、早耳で、情報集めの名人である。

場末の酒場の人びとは、この男が、犬政（いぬまさ）という、トバク師であることも、ちゃんと調べあげていた。

この酒場のあった、広島という町は、また、不思議なところである。

関西の中心をなす大阪と、九州の中心をなす福岡とはさまれた、五十万人そこそこの小さい田舎町である。

普通なら、通過都市となってしまうはずである。

ところが、この不利な条件の中にあつて、広島は広島としての独立圏をもって、関西の大阪と九州の福岡に対抗しているのである。

ここに住む人びとは、底知れぬエネルギーと、根強い闘魂を持っている。

闘魂は、勝負ごとをこのむ心にも通じ、広島市、総ぐるみになって、職業野球を育てあげたりする。

ほんとに、この町の人びとは、勝負好きなのである。

広島を中心として、大阪、山口にかけて、闘犬が、しばしば行なわれる。

ここで行なわれる闘犬は、土佐で行なわれる、あの闘犬とはちがう。

賞金めあての闘犬である。

バクチである。

もちろん、公には行なうことができない。